
殺人一家『密林』

意榎愁?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺人一家『密林』

【Nコード】

N1101Y

【作者名】

意榎愁？

【あらすじ】

殺人の相談なら、何でも相談してください！殺人一家『密林』解決いたします！ばあちゃん……こんなチラシ配るつもりなのか？

おおぬき。(前書き)

そろそろ、人類が滅びそうで怖い。という訳で懸懐愁？です。書いてみました。いや、書かせていただきました。よろしければ読んでください。

おおぬぎ。

人生を幸福にするためには、日常の些事を愛さなければならぬ。

- 芥川龍之介

「こりやひでえな」

「そうつすね……」

警部である、大貫渡おおぬぎわたるとその部下明石仁あかしじんは血まみれの殺人現場を目の当たりにしていた。死体は五体ほど転がっており、どれも直視できるといふような可愛い殺され方をしていなかったが、捜査をする以上見ないわけにはいかなかった。

「うええ！」

「いつになれたら死体に慣れるんだお前は……」

死体に慣れる。それは警察官としての職務を全うする上で非常に重要な事であった。死体に慣れなければ、そもそもの目的である調査などできるはずが無いからだ。だから、大貫は新米の部下に一番最初に教える事は、『死体に慣れる』。そのみであった。

しかしながら、明石が嗚咽を漏らすのも仕方ない、という気持ちが大貫にも少なからずあった。

明石は新米だ。ただでさえ、新人が死体に慣れるまでは相当な時間を必要とする。なのにも関わらず、慣れていない状態での、圧倒的に虐殺された死体（死体は上半身と下半身に分かれており、中から腸などの臓物が食み出していた頭部は粉碎されていて、それが人かどうかも分かる状態ではなかった）を見るといふのは相当なキツイものがある。

大貫自身、若い頃は死体を見ては吐いていた、という経験があるので仕方ないという気持ちは拭えなかった。

「はあ、はあ。死体に慣れるなんて、そんな異常な感覚を持ちたくはないです」

明石の言っている事は正論ではあった。だけれど、警察官としての発言ではなかった。その発言は、死体を見る事を専門としない職務の人間がする発言であった。明石の発言には、警察官だという自覚が無かった。

「嫌でも慣れるさ。警察官なんて、碌な仕事じゃない」

警察官は確かに正義の味方ではある。泥棒を捕まえるし、スピード違反は取り締まる。だが、殺人に関していえば、警察官は正義の味方でも何でもない、ただの人間なのだった。

死体を発見し、調査する。それで犯人が見つければ万々歳だし、見つからなければ仕方ない。それで終いだ。結局、殺された人を救ったわけではないのだ。

この事は、大貫が警察官として働き始めて以来、ずっと腑に落ちないと思っている事だった。

正義の味方と威張れるような事を、大貫はしていない。

「それにしても、ひっでえ殺され方だ。ここ最近の殺人事件と同一人物だな」

「本当っすね。この、血文字で『I hate all』って書く所も同じですしね。血文字で俺は全てを恨む、って書くななんて不気味すぎるっす」

「まあ、不気味っちゃ、不気味だよな……」

「俺聞いたことあるんですけど、殺人者には二つのタイプがあるらしいんですよ。一つは人を殺す事に快感を覚える奴。もう一つは人を殺す事で何らかの恨みを果たす奴。今回の奴は、どうも後者っぽいですね」

「二つのタイプ……ねえ」

大貫は、そんな事は関係ないと考える。

人を殺す事にどんな理由があるかなんて関係ないのだ。全ては人を殺したという事実が悪徳である、という事だけである。理由が有っても無くとも、罪が軽くなる事も、勿論罪が重くなる事もあってはならない。

「大貫部長、もしかしてこの殺人事件、単独犯じゃなくて集団なんじゃないんですか？」

「集団？」

「だって一人でこんなにも人を殺せる人間、想像できますか？俺は想像できないです」

「何言ってるんだ。平気で何人も殺せるような奴以外、どんな奴が殺人をするってるんだ」

「そりゃそうですけど……。ほら、暗殺を家業とする輩がいるじゃないですか」

「たとえば？」

「密林、とかですよ」

「あの有名な暗殺一家か……」

密林。依頼の成功率は九十パーセントを誇るが、莫大な依頼金が必要なため、国や大富豪しか依頼する事が出来ないという、有名な暗殺一家。

しかし、有名なのは名前のみで、その他の情報は一切が謎に包まれている。有名でありながら、謎。そんな矛盾でさえも許されてしまうのが、密林という一家なのだ。

「いや、ないな。あいつらは、血で文字を書いたり、残虐な殺し方はしない。そういうのは、あいつらにとっては無駄な事だからな。」

それに、あいつらは頻繁に殺人をしたりしない。金がかかるからな。依頼がなかなか来ないんだ」

「部長、詳しいっすね」

「警察官にはいるんだよ。そういう業界に詳しい人間がな」

「そ、そうなんすか」

「ああ。だからまあ、密林で可能性はなしだ」

そう考えた理由が、大貫にはもう一つあった。

密林は、一般人は殺さない。無抵抗な人間は殺さない。密林が殺すのは、明確な敵意を持った人間。殺すに値する人間だけだ。

密林の依頼の失敗率十パーセントの真相は、殺すに値しない人物

を殺さず帰った、というのが理由である。これも、他人伝いに聞いた拙い情報ではあるが、大貫は信じるに値する情報だと思っている。「密林か……。会えるもんなら会ってみてえな」

大貫は、一人で呟いた。

そんな願いが、部下である明石に聞こえないように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1101y/>

殺人一家『密林』

2011年11月1日02時13分発行